

## 書 評

江種満子・漆田和代編

# 『女が読む日本近代文学 フェミニズム批評の試み』

生 井 知 子

編者の一人である漆田和代氏の「あとがき」によれば、氏は、《文学作品を素材にして女性論を展開すること》や《文学を文学外のものさしを使って云々する》《イデオロギー批評》は殆ど無意味であると考え、《テキストのていねいで慎重な読みを貫いて、従来の男性（研究者・批評家）中心の読みの誤りや理解の狭さを具体的に検証したり、別の読み方が十分可能であることを立証したりする》事を目指して、このアンソロジーを編んだという事である。

私は、この漆田氏の志に、もろ手を挙げて賛同するものである。しかし私には、残念ながら、ここに集められた八本の論文が、現在の日本文学研究者の最良の人々に、目から鱗が落ちる体の衝撃を与え得るような優れたものであるとは全く思えないのである。以下、順次論文の内容を紹介しつつ、私なりの疑問をぶつけて見たい。

1 江種満子氏の『『暗夜行路』の深層』は、時任謙作の求める女性像が、「良妻賢母」という明治中期以降の典型的なイデオロギーと重なりとし、直子の内面の多義的なエロスの発動が二人の関係を脅かすが、謙作も直子も語り手や作者までもが、直子の内面のエロスの発動に目を瞑って深層に封じ込め、主権在夫的な「家庭の幸福」というイデオロギーを守ったと論じる。

江種氏は、この論文でキー概念として特殊な意味合いで用いているエロスという用語に十分な概念規定を与えていないので、論旨が把握しにくい点があ

る。例えば直子と要の関係を、江種氏はエロスの発動として肯定するようである。しかし私には、直子は謙作に対してより強くエロス(?)を発動させているように思われる。とすれば、江種氏は、直子が不特定多数の男性にエロスの赴くままに身を任せる事を、謙作がもっと寛大に許すべきだと言いたいのだろうか? それとも直子は要と結婚すべきだと言うのだろうか? 江種氏がエロスを重大視するだけに、また、江種氏が結局は謙作の生き方を問題にしているだけに、倫理とエロスの関係の曖昧さが気になるのである。

江種氏は、志賀が良妻賢母イデオロギーに従って作品を書いたとするようだが、もしそうなら、罪を犯した側の苦悩が作品の主題になり、直子が不貞ゆえに厳しい罰を受け、罪の償いを終えて良妻賢母に戻る事によって幸福が回復されるというストーリーになる筈ではないのか? それがそうならないで謙作の内面だけの問題になり、しかも最後に直子を許す事で謙作が幸福になるのは、これが、《女が弱くても許すことはできない》という良妻賢母イデオロギーに従って書かれた罪深い女の物語などではなく、本質的には運命に呪われた男の物語だからであろう。事実、江種氏が集中的に取り上げている直子の問題は、この作品において、謙作の物語の一部分を占めるに過ぎないのである。江種氏の論が『暗夜行路』の統一的理解に失敗するのは、男の物語を女の側から読もうとする事にそもそも無理があるからなのである。

2 関礼子氏の『闘う「父の娘」——葉テキストの生成』は、樋口一葉が男性中心の明治の家父長制の下にありながら、彼女自身、樋口家のために闘う女家長であったという両義性に着目し、一葉が作家的出発にあたって、父の娘の奮闘物語という点で田辺花圃の『八重桜』などとの間に相互テキスト性(!)を見出しつつも、結局は父権を支える花圃のテキストから訣別したと見る。また、一葉が日常使う言葉をヒロインにも使わせた所、半井桃水から書き言葉としては荒っぽ過ぎると注意を受け、以後改めたというエピソードに、小説文体をめぐるジャンルの掟=性的差異の掟の検閲を見、一葉が桃水よりも萩の舎を選んだのは女性表現者としての矜持を守ろうとした結果であると解釈する。そして

『雪の日』の中に、花圃・萩の舎グループの傘下で自己固有の表現を貫こうとする苦闘を見出す。即ち、この物語をヒロインの懺悔物語とする事で、表向きは従順な父の娘という花圃の枠組みに留まりながら、雅文体の構成員を利用し、恋の成就を肯定するメッセージを密かに流通させるエクリチュール（!）を産み出したとするのである。

しかし、一葉のテキストに見られる恋愛に対するアンビヴァレンツを、掟に従うと見せかける意図的な戦略に過ぎず、本音は恋愛肯定にあるとする事は、一葉の複雑な内面およびテキストを戦後民主主義的に単純化・平板化する事になり、賛成できない。半井桃水との絶縁の意味付けも強引に過ぎよう。

なお私は、「作者の死」より「研究者の死」の方が問題だと思っている流行遅れの人間なので、記号論のジャーゴンを多用する事にも疑問を感じた。

3 沼沢和子氏の『『伸子』のプロポーズ』は、伸子が《自分の方からプロポーズするに至ったプロセスと、そこに含まれていた問題を追ってみた》ものである。その結論は、伸子の結婚相手が佃であったために、伸子の母性は開花せずには終わったが、百合子は《ソビエトに、社会的自我の充足と母性との両立を保障する社会を見出し》、後に母性を正當に評価するようになったという事のようなのである。

この論文は、沼沢氏自らが言う通り、プロポーズするに至ったプロセスをただなぞりながら、所々で立ち止まって、そこに沼沢氏が見出した問題を論じて見せるというだけで、結論へ向けた首尾一貫した論理的な構成が欠けている。そのために、沼沢氏の考え方を予め熟知していない読者は、論者の意図が見えないままに読み進めねばならず、このアンソロジーの中でも最も読みづらいものになっている。論文の書き方について、もっと工夫が必要であろう。

4 漆田和代氏の『「渾沌未分」(岡本かの子)を読む』は、亀井勝一郎以来定着して来たおどろおどろしいイメージからかの子文学を救い出し、かの子文学の《健康》な側面を強調した《普通の読み》を目指して、従来男を食う或いは飼う小説とされて来た『渾沌未分』を、丹念に読み直そうと試みたものである。

その結果、漆田氏は、この小説の主題は《「渾沌未分」の境へ向うものとしての》生死を賭けた《存在論的な「投企」》（!）であり、「海豚の歓び」「九淵の説」「渾沌未分の境涯」という三つの水の体験は、弁証法における正反合（!）の三つの局面を構成するとした。

亀井勝一郎はその評論『川の妖精』の中で、岡本かの子は《常に「いのちをかけて」「いのちもて」である。（中略）一番好きな女は?》と問うたとき、氏は「八百屋お七」と答へ（中略）一番好きな言葉は?》といふ問いに対しては、ジョルジュ・サンドの「闘争か然らずば死か」と答えたと書いているのだが、漆田氏の死への「投企」説が、亀井説を乗り越えた事になるのかどうか、疑わざるを得ない。また、漆田氏自身も「海豚の歓び」「九淵の説」「渾沌未分」が作中で同じ意味で用いられている事実を認めながら、それを「弁証法」の正反合と結び付ける強引さにも問題が残る。ハイデッガーやヘーゲルなど権威あるドイツ人男性の言葉を有難がる事が、フェミニストに相応しい事かどうか疑問であろう。

5 小林富久子氏の『『女坂』－反逆の構造』は、江藤淳の新潮文庫解説を、『女坂』を専横な男性の魅力を賛美する作品にしかねないと糾弾しつつ、従来の批評すべてを不十分なものとし、『女坂』は我が国の男性中心的なイデオロギー的伝統および父権的権力システムの伝統を「脱構築」（権威あるフランス人男性の御言葉だが、この場合は誤用）する試みだったとする。

小林氏は、倫が白川家の繁栄を積極的に支えている事について、白川家を《出ることは身の破滅を意味しかねないし》《自身の子供と孫》《の明らかな不幸にもつながるから》という簡単な説明で満足しているが、倫が須賀を人身御供にし、岩本に由美を押し付け、加代の子を処分して、明治の成功者白川家に加担して生きる共犯者として設定されている事の意味を、積極的に解き明かすものとは言えないだろう。その他、第三章「女坂」で坂道を登る倫の感懐に、カフカ・サルトル・カミュらの不条理的ヒーローと似た次元の認識を見たり、作品末尾で倫が夫に遺言書を読ませたのは、後で実行する最初で最後の自己主張

の衝撃力を強めるための計画的な演技だったと解釈する所にも疑問が残る。江藤淳の解説は確かに誤りを含んでいるが、《この小説を、日本の「家」という歴史的な制度を描いたものと限定するのは、おそらく傑作<sup>80</sup>を不当におとしめることになる。》という提言は、正当に受け継いでいかねばならないだろう。

6 田嶋陽子氏の『駒子の視点から読む『雪国』』は、島村の視点で描かれた『雪国』を、駒子の側から読み直そうとする試みである。田嶋氏は、島村は駒子に〈娼婦性〉と〈母性〉という二つの〈制度的女性像〉を併せ持つ理想的な女性像を求め、あるがままの駒子を受容する事が出来ないとし、糾弾する。また氏は、葉子は駒子の中の〈抑圧された自我〉の象徴レベルにおける具象化であり、〈母性〉という期待される女性像を完璧に引き受けたために内面を病んでいるとし、駒子も一旦は行男のために《〈献身〉と〈自己犠牲〉を貫く道を選ぶが、女性差別社会のからくりは歯がみし、怒りと絶望感を持ち続け、世間と闘い、ついには島村の求める〈制度的女性像〉を拒否し、自己を主張するようになっていくと論じる。

しかし、『雪国』という作品のどこを探しても、女性差別に対する駒子の怒りや自立の決心など描かれていないし、〈制度的女性像〉と本当の自分との矛盾に苦しんでいるという描写もない。田嶋氏の説明は、駒子が島村を愛し、別れを惜しむ事実と完全に矛盾している。田嶋氏の語る駒子像は、氏の夢に過ぎず、『雪国』の駒子とは別の存在であろう。そもそも小説の登場人物は実在の人物ではないのだから、島村や川端の視点とは別の駒子の視点など存在する筈もないのだ。表題とは違ってこの論が、徹頭徹尾、田嶋氏の視点からの読みになっているのは、当然の結果と言わねばならない。

7 坂田千鶴子氏の『『山の音』—ズレの交響』は、『山の音』を、信吾の女に対する一方的な期待と現実の女たちとのズレが、家父長的な価値観を根強く持った信吾を揺さぶる物語と見、《女が、自身の伸びやかな性と生のために、自分の力で人生を切り拓いてゆく時代の到来を、川端は深く見据えていた》と評価する。そして、女を敵視する主人公に一体化する事を余儀なくする作者の

「陰謀の構図」に読者が抵抗しながら読み進めば、保子らの信吾に対する批判こそが作品の骨格を支える基軸である事が分かる、作者は苦笑を浮かべて、歪んだ認識を持った信吾を見つめているのだと論じる。

しかし、作者が自ら「陰謀」を仕掛けつつ、その罠にはまらぬ読みを読者に要求したとするのは無理であろう。また坂田氏は、菊子が《「天の<sup>(ママ)</sup>声」を信吾とともに聞いてあたらしい地へと立ち去ってゆく決意を固めた》とするが、実際は、信吾が自分から離れて《自由になれ》と説得するのに、菊子は信吾から離れたがらず涙ぐむのである。そもそも坂田氏のような読み方で、作品の随所に現われる信吾の死の予兆と菊子に対する倒錯的な性的夢想の意味をうまく解釈できるのか、そして坂田氏は、川端文学全体の流れの中で『山の音』をどう位置付けるつもりなのか、はなはだ疑問に思う。

8 千種・キムラスティーン、ジョリッサ・グレイスウッド両氏の『母性幻想を織る男ー『眠れる美女』ノートー』は、『眠れる美女』を、ノイマンの『グレート・マザー』に従って読み解こうとしたもので、その結果は、江口の泊る密室は子宮で、江口は胎内回帰する事で生を更新する、作中の女性は誕生を司るグッド・マザーと死を司るテリブル・マザーという神話的・元型的女性像に容易に還元できる、これは、母の中の性的な要素に対する二つの相反する感情の投影であるが、黒い娘が最後に死ぬ事によって、テリブル・マザーを抹殺したいという江口の願望が実現され、福良の名が最後に出て来る事で、江口自身の死と再生が暗示されて終わるので、この作品は老人のためのお伽話である、というものである。

川端における母のイメージを重視する事は正しいが、この論の何処がフェミニズム批評なのか私には分からなかった。また単純な図式に還元する事には無理が多く、第二・第三夜の眠れる美女は、グッド・マザーとテリブル・マザーの両面を持つと論者自身も言っているように、簡単な割り切りは出来ない。眠れる美女たちの内、論者がグッド・マザーとする者も、別段、江口の生命を更新し若返らせる訳ではない。論者は黒い娘が最後に死ぬ事によって、テリブ

ル・マザーを抹殺したいという江口の願望が実現されるとするが、黒い娘は金の首輪や口紅が《ほほゑましく》思えるほど野蛮で、寢床から押し出されてしまった江口は《それがをかしくて笑ひがとまらなかつた》程であり、テリブル・マザーとはイメージが違いすぎる。また、江口が本当に黒い娘を殺したいと考えていたという事実はなく、黒い娘の死を江口が喜ぶ事も勿論ない。第五夜に江口が死んで再生するというのも無理な読みであろう。

以上、批判的言辞を連ねたが、私は男女平等という理想に反対しようとしているのではない。ただ、フェミニズム批評が、女は馬鹿だという男たちの偏見に、新たな一例証を付け加えるものとならぬよう注意して欲しいと思っているだけである。

漆田氏は論文の中で、《男性批評家や研究者が、自身の女性に対する欲望、恐怖、嫌悪を投影してテキストを読んでしまう》危険性に言及しているが、この危険性は女性研究者も男性と同じ程度に持っている。女性の目で読みさえすれば容易に過去の研究を乗り越えられると思って安易に論を立てる事は、大きな誤りである。

なお本書については、「日本文学」一九九二年九月号に、東京大学助教授小森陽一氏による好意的な書評がある。公平を期するためにも併せ読まれる事をお勧めする。

(新曜社、1992年3月、本文246頁、2,266円)